（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所 属（学部（研究科）・学年）: 法文学部・1年

氏 名: 鷗野　ほのか

授業科目名	海外研修基礎コース　in　カリフォルニア
研修先（国・地域） 滞在地	米国・カリフォルニア
研修期間	平成29年2月19日　～ 平成29年3月5日

〔研修を通じて得た成果〕

この研修を通して私は3つのことを学んだ。1つ目は、日系人についてである。研修前に日系人の歴史について調べていたが、実際に現地へ行ってみると、それ以上に学ぶことがあった。日系人は収容所へ入れられたときに名前ではなく番号で呼ばれていて、同じ人間なのに人間として扱われていなかったということ、収容所へ行く前に一時的に馬小屋で生活しなければならなったことなどである。私は2世であるジミー・ヤマイチさんに「日本人を恨んだことはないか」とお聞きしたところ、「それは仕方のないことだ」とおっしゃっていた。日系人であることに誇りをもっていると知り、ジミーさんの寛大さに私はとても驚いた。おそらく収容所にいた時代は日本人のことを憎んでいたと思うのに、時代が変わっていき人々の心情にも変化が生まれているのだと感じた。日本人は日系人についてあまりよく知らないと思うため、私はもっと日系人について多くの人に伝えていくべきだと感じた。2つ目は、アメリカの人のボランティア精神の強さである。私たちはセレスという施設を訪れた。そこでは学校の終わった学生たちが、がん患者など病気の人のための食事を作っていた。私はとても驚いた。なぜなら学生たちはボランティアとしてこの活動に参加していたからである。日本の学生はボランティアに対してあまり興味がないと思っている。しかし、アメリカの学生はこのようなボランティアにすすんで取り組んでいる。後でソノマ州立大学の先生に「なぜアメリカの学生はボランティアに対して積極的に参加しているのか」と聞いてみると、先生は「アメリカは多様な社会で多くの人々にニーズがあるから」とおっしゃっていた。私は自分のことだけでなく周りのことも考えながら、困っている人がいたら助けることができるような人になりたいと思った。ボランティアについても積極的に参加したい。3つ目は、失敗を恐れずに挑戦するということである。私はソノマ州立大学で5日間講義を受講した。その中で質問をするときに、「この文法や単語はあっているのか」ととても不安になり、質問できないことも多くあった。しかし勇気をだして質問してみると、英語が通じたようで納得のいく答えを返してくれた。文法や単語など細かいことは考えずに英語を話してみるということが必要だと感じた。また、私のホストファミリーはいつも「分からないことがあったら必ず聞いてね」と言ってくれて、私の拙い英語でも理解しようと話を聞いてくれたり、私が理解してないようなときは簡単な英語に直してくれたりしてとても親切だったためとても感謝している。これらのことをこの研修で学ぶことができた。日本と違う生活習慣や文化に最初は戸惑うことも多々あったが、日が経つにつれて慣れていくことができた。またアメリカの文化の面白さも感じることができた。これからも英語の勉強をしていって、いつかまたアメリカを訪れたいと強く思った。最後にこの研修に参加するにあたって支えてくれた家族、中谷先生、米増先生、セバストポールワールドフレンズの皆さん、ホストしてくださったDunlap familyに感謝申し上げたい。

〔研修後の抱負〕

他国の文化について学びたいと思ったため、文化について学ぶことができる講義を積極的に取り深く学んでいきたい。また、アメリカには、自分たちの地域の問題を自分たちでなんとかしようとする人がいて、それに協力するボランティアもたくさんいた。日本でのボランティアにも積極的に参加し、地域に貢献していきたいと思う。。こうした考え方を鹿児島でもこの研修で学んだことを家族や友人に話すことで、日系人のことなどあまり日本で知られていないことについて伝えていきたい。英語の勉強も足りていないと思ったため、TOEICを受けるなどして英語力をさらに向上させていきたいと思う。

（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所 属（学部（研究科）・学年）: 法文学部・1年

氏 名: 高田　博行

授業科目名	海外研修基礎コース in カリフォルニア
研修先（国・地域） 滞在地	米国・カリフォルニア
研修期間	平成29年2月19日 ～ 平成29年3月5日

〔研修を通じて得た成果〕

これから学習面と経験の二つに分けて私がこの海外研修での成果や学んだことについて述べたい。まず、前者における成果は、英語の聞く能力と話す能力が向上したと言うことと、プレゼンテーションを作るとき・発表するときに心がけることを学んだことである。プレゼンテーションのことについて詳細に言うと、サンフランシスコ州立大学へ行きプレゼンテーションをした後に、私が今まで見落としていた重要な点を再確認したということである。また、フードバンクやフェアトレードを行なっている企業へ行き、それらの活動についての知識や日本では聞いたことのないような新たな考え方を用いて地域に貢献する仕方を学ぶことができたとともに、興味を持つことができたことも他の成果として挙げられる。次に後者における成果について述べる。まず、私が学んだこととしてアメリカの社会が挙げられる。詳細にいうと、私はアメリカに対して様々な固定観念を抱いていたが、実際に現地に行ってみるとその様子が私が抱いていた固定観念と全く異なったものでありとても衝撃を受けたということである。また、アメリカの良い面だけではなく、多数のホームレスの人々がいるなどの社会・福祉問題を知ってショックを受けたこともあり、日本に関しても他人事ではないということを痛感した。次は、別の成果や学んだもので現地の人と接して衝撃を受けたものについて述べる。例を挙げると、日本人とは異なり自分の意見をはっきりと相手に伝えるとともに自分の中で明確な意見を持っている傾向にあるということ、私が思っている以上に他の人に対して友好的であるということ、そして、現地の学生が日本の学生以上に政治・ボランティアやその他の社会貢献に対して関心を持っているということが挙げられる。これらの経験は、私に様々な変化を生じさせるきっかけになったと考える。詳細にいうと、この研修を通して新たな目標や学びたいことを確立するとともに、私の中で劣っていることや失敗と考えることをいかによくしていくかと考えるようになったことである。以上のことが私がこの研修で得たものである。

〔研修後の抱負〕

今後の課題については、まず今回の研修によって得た私の目標を達成するために、私の中の課題や問題点をどのようにすれば良いか考察したい。最初に、この研修で得た私の目標は大学で社会や政治について学ぶということと、もう一度アメリカへ行き英語やその他のことについて学ぶということである。このような目標を立てた理由は、私があまりにも無知であるということを痛感したからである。周りの人や現地の学生に大きく遅れをとっていると考えたからである。何よりも自分が暮らす地域の問題、日本社会の問題に無関心であったことにきづいた。まずは問題を知ること、そして自分にできる取り組みについて考えたい。新たな目標を立て、いかにアメリカでのこの貴重な経験を有用に活用するかということが最も重要になってくると考える。以上が私が考える今後の課題である。

（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所 属（学部（研究科）・学年）: 法文学部・2年

氏 名: 秋永　有賢

授業科目名	海外研修基礎コース　in　カリフォルニア
研修先（国・地域） 滞在地	米国・カリフォルニア
研修期間	平成29年2月19日　～ 平成29年3月5日

〔研修を通じて得た成果〕

本研修では、主に3つのテーマを題材とした。第一に、多文化主義について、多様な移民、日系人に焦点を当て市内フィールドワークや日本街、サンノゼ日系博物館などを訪問した。市内フィールドワークでは現地の雰囲気を肌で感じ、現地の人の意見を聞くことができ、チャイナタウンでは住民の高齢化と若い年代の出離れが顕著で観光地化している現状、ミッションではかつてはヒスパニック系住民の町でありメキシコ系統の人多いがそれを感じさせないほどに他住民も多い現状、カストロではLGBTの現状について理解を深めることができた。また人種差別が引き起こした日系人の強制収容の歴史を知ることによって現代の人種問題、多数派という建前で行われることの危険性などの考察もこれから進めたい。第二に、経済格差と社会福祉について、KIMOCHIやKOKORO訪問、ソノマ州立大学による貧困とホームレスというテーマでの講義とFoodBankのフィールド視察を行い理解を深めた。経済格差と社会福祉については、国や州の制度では支えきれない現状があり必要性の大きさから人々のボランティアや資金、現物寄付が多く継続的に行われていることを実感した。これは格差が目に見えない状態の日本において課題となるところであり考察を深めていきたい。第三に、グローバリゼーションへの地域の挑戦について、ソノマ州立大学では持続可能性というテーマで環境に対する講義を行い、フェアフィールドオズバーン保護区での動植物、気候、土地、水の保全やパーマカルチャーセンターで農業について理解を深めた。また、セバストポールでは、フェアトレード企業や地産地消の促進をしているなどその土地に根付いた店を視察し、食料について理解を深めた。ローバリゼーションへの地域の挑戦については、これからを地球という広い視点で考えた場合限られた資源の中でどのように経済、社会、環境を形作っていけるかが問題であることを知り、今ある資源を保護調整し、どのように公平な分配を行い、どのような手段があるのかというヒントを得ることができた。

〔研修後の抱負〕

私は特に経済格差と社会福祉について、日本そして鹿児島という地域に置き換えても経済格差というものは見えにくいものの援助が必要な人は多く、その証拠に鹿児島にもフードバンクかごしまや子ども食堂などが多く存在することを知った。しかし、これらの活動の知名度は高いとは言えず、活動の拡大にも限界がある。このようなボランティア団体の活動は生活保護など国の制度と同様に重要であり、いかに格差の現状を人々に知らしめ、カリフォルニアのように住民相互の共生協働、寄付などによる安定・継続したシステムの構築をしていくのかがこれからの今後の課題であり、考察を進め、地域のために行動したい。

（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所 属（学部（研究科）・学年）: 法文学部・1年

氏 名: 大野　朱莉

授業科目名	海外研修基礎コース　in カリフォルニア
研修先（国・地域） 滞在地	米国・カリフォルニア
研修期間	平成29年2月19日　～ 平成29年3月5日

〔研修を通じて得た成果〕

私は海外に行くのはこの研修が初めてで、アメリカでは日本とは全く違う世界が広がっているのだろうと予想していた。もちろん、日本とは大きく異なる部分がたくさんあったが、それだけではなく、日本との共通点も見つけることが出来た。そのため、自分の目で見たすべてが目新しく新鮮に思えたわけではない。近親感すら覚えたこともあった。どのようなものに前述の感情を覚えたのかというと、鹿児島でも見かけられるサブウェイやマクドナルド、スターバックスコーヒー、セブンイレブンといった店である。私はそういった店を見たとき、世界はグローバル化が進んでいるのだと実感した。世界が画一化され、地域ごとの独自性が徐々に失われているのではないかと考えた。また、大型のショッピングセンターにも行く機会があったが、店の並びこそ違ったものの、建物内の構造などは日本とあまり変わらなかった。私はこの経験を通して人を呼び込むためには、その場所にしかない魅力を発見していくことが大事なのだと感じた。日本では少子高齢化が進んでおり、それは特に地方都市に顕著である。私は将来、地方公務員になって、地方都市に人を呼び込み、地方を活性化させたいと考えている。そのために、その地方都市にしかない魅力を発見し、それをアピールしていきたい。ホームステイをさせていただいた、セバストポールという地方都市には工場群跡を改修し、地元の小さな飲食店等が入るTHE BARLOWと呼ばれるエリアがあった。また、その付近には地元の新鮮な野菜や肉、工芸品などを売る、ミュニティーマーケットもあった。セバストポールも、人口が減少し少子高齢化が進んでいると聞いたのだが、THE BARROWやコミュニティーマーケット、これらとはまた別にある商店街はたくさんの人で賑わっていた。
日本でもこのような取り組みを参考に、地方を元気にしたい。

〔研修後の抱負〕

最大の課題はやはり語学力の向上である。相手の発言を聞き取ることは出来ても、それに対して英語で質問したり、意見を言ったりすることはなかなか出来なかった。これからは英語で意見などを言えるようになることを目標に英語の勉強を頑張っていきたい。また、積極的に様々な人と交流し、異なる価値観に触れることで、自分の世界を広げていきたいと思う。

（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所 属（学部（研究科）・学年）: 工学部・2年

氏 名: 藤田　紗世

授業科目名	海外研修基礎コース in カリフォルニア
研修先（国・地域） 滞在地	米国・カリフォルニア
研修期間	平成29年2月19日 ～ 平成29年3月5日

〔研修を通じて得た成果〕

今回の研修では、環境、貧困、ボランティア、日系人など米国に行き幅広く学んできた。その中でも、私は、アメリカ人のボランティアの積極性に驚いた。もちろん、地域によっては、ボランティアに対して積極的に行われていないところもあるようだが、私たちが訪れたソノマでは高校生が患者やその家族にごはんを提供するため、畑で野菜を育てたり、料理をしていた。日本では、そのようなことはボランティアではなく仕事としてやっていると思う。それに高校生がそのようなボランティアに参加する機会、場所はあまりないと思う。また、フードバンクを訪問した。そこでお金、時間、食べ物によるボランティアがあると話を聞いた。お金を提供する、ボランティアをする時間を提供する、そして、食に恵まれていない人に食べ物を提供する。スーパーマーケットに大きな缶が置かれて、中に提供される食べ物が入っているのを確認できた。食べ物はどうしても腐れてしまうイメージがあるが、その決まりが定められていてフードバンクに運ばれてくる缶の9割は使えるものということにも驚いた。私たちは、サンフランシスコのグライドチャーチでホームレスの方々に朝食を提供するボランティアに参加した。教会には列を作るほどのたくさんのホームレスが来て、提供された朝食を食べていた。日本では、ホームレスに対して、イメージが良くなく、冷たい視線を送ってしまう人もいると思う。だが、教会でボランティアした人たちは、一緒に住んでいる人として当たり前のように食べ物は提供しようという心に驚いた。2週目にホームステイを体験した。World Friendsのおかげで、毎日不安なく大学に行ったり、フィールドワークをすることができた。ごはんも、日本では食べられないようなものをその日体験したことをホストファミリーと話ながらいただくことができ、その体験も面白かった。今回の研修で、本当に多くの人々と出会った。そして、それもボランティア精神のもとで私たちを受け入れてくれた。これだけ濃い2週間を送ることができたのは出会った方々のおかげだと思う。感謝して、もっと勉強してまたぜひ会いに訪問したい。

〔研修後の抱負〕

英語を話すことに対して、怖さがなくなったが、話を続けることができなかった。専門英単語などは事前にもっと調べて、聞き取れるようにしておけば良かった。アメリカの貧困問題について印象に残っているので、日本の貧困についての問題も調べ、比較してきたい。また、Permacultureなど、学んだことは、全て、日本と関係していることなので、積極的に調べていきたい。アメリカで学んだことを日本の地域社会の問題を考えるために生かしていきたい。

（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所 属（学部（研究科）・学年）: 法文学部・2年

氏 名: 萩原　三希子

授業科目名	海外研修基礎コース　in　カリフォルニア
研修先（国・地域） 滞在地	米国・カリフォルニア
研修期間	平成29年2月19日　～ 平成29年3月5日

〔研修を通じて得た成果〕

今回の研修においてフィールドワークを行ったり、ホームステイをしながらソノマ州立大学で講義を受けたことで主に3つのことが得られたもしくは経験できたと考える。第1に、市内でフィールドワークをした際にミッション地区やカストロ地区など多様な特徴を持った地域を訪れた事で私がアメリカ合衆国に抱いていたイメージが変化したということである。フィールドワークをするまでは街中で白人が闊歩しているだろうと思っていたのだが、実際は白人の方が少ないという印象を受けた。加えて、私のグループはよく道に迷いそのたびに人に聞いて回っていたのだがほとんどの人が親切に対応して下さり、正直な所予想していたものと異なっていて戸惑ってしまった。何故なら、トランプ氏が大統領になったことを受けて現在のアメリカ国内では外国人への風当たりが強いのだろうという偏見を持ってしまっていたからである。だが少なくともカリフォルニア州においては、様々な人種が共存しており、外国人に対しても優しい人が多いということを肌身に感じるとともに、アメリカ合衆国という国を一面的に見ていたのだということを理解するとともに偏見を打ち砕かれることが出来た。

第2に、教会でホームレスの人に向けて食事や住居の提供が行われていたり、Redwood Empire FoodbankのようにNGO団体だが地域コミュニティによる寄付によって運営の大部分を賄い食糧難の人々に届ける食材も地域で集めるなどして地域貢献している団体を視察した際に、地域で互いに助け合い積極的にボランティアに参する姿勢が強く、日本と異なっているなと感じた。国民性の違いが表れているのか、日本は公共機関に頼っている節があるが、アメリカでは政府の助力が少ない中地域の人々が積極的に互いを助け合っていく姿勢について学ぶことができた。日本でも、地域の問題を自分たちで協力して解決する姿勢を忘れずに、自身も生活を見直し積極的にボランティアに参加していこうと思った。

第3に、自然保護区で環境の保全に関する講義を受けた際に生息している植物について学ぶ機会があり、その中でも、bay treeが印象に残った。先住民の知恵によるとbay treeは頭痛に効くといわれていると聞き、半信半疑ながらも匂いを嗅いでみたところ1週間続いていた片頭痛が嘘のように消えて大変驚いたからである。先住民の知恵は侮ってはいけないと思わされた。

〔研修後の抱負〕

私は特に経済格差と社会福祉について、日本そして鹿児島という地域に置き換えても経済格差というものは見えにくいものの援助が必要な人は多く、その証拠に鹿児島にもフードバンクかごしまや子ども食堂などが多く存在する。しかし知名度は高いとは言えず活動の拡大にも限界がある。このようなボランティア団体の活動は生活保護など国の制度と同様に重要であり、いかに格差の現状を人々に知らしめ、カリフォルニアのように住民相互の共生協働、寄付などによる安定・継続したシステムの構築をしていくのかがこれからの課題であり、考察を進めたい。

（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所 属（学部（研究科）・学年）: 医学部・1年

氏 名: 白石　早希

授業科目名	海外研修基礎コース　in カリフォルニア
研修先（国・地域） 滞在地	米国・カリフォルニア
研修期間	平成29年2月19日　～ 平成29年3月5日

〔研修を通じて得た成果〕

私は今回の研修で、貧困と格差について学んだ。研修前のアメリカのイメージは、ほとんど全ての人が豊かで平等な暮らしをしているというものだった。しかし、実際は多くの人々が貧困や格差に苦しんでいた。カリフォルニア州の北部に位置し、アメリカ西海岸を代表する世界都市の一つであるサンフランシスコには多くのホームレスの人々がいた。様々な年代の人がおり、中には私と年があまり変わらないような人もいた。豊かな暮らしをしている人々がいる一方で、住む家やその日の夕食にさえ困っている人々がいることを知った。そして、そのような人々を支援するボランティア活動も日本よりずっと充実していた。今回の研修でも、二つの食料支援ボランティア活動に参加した。

一つ目は、グライド・メモリアル・ユナイテッド・メソジスト教会での活動である。そこでは、ホームレスの人々への朝食作りと貧困の子供たちへの昼食作りを行った。二つ目はフードバンクでの活動である。そこでは、貧困の家庭に配布する食材の詰め込み作業を行った。どちらも多くの人が積極的にボランティア活動に参加していた。日本では、学生はあまり積極的にボランティアに参加しない印象がある。私も、あまりボランティア活動に参加したことがない。しかし、アメリカでは多くの学生が自分からボランティアに参加していた。アメリカだけの問題点ではなく、日本でも取り組むべき問題として貧困や格差について考えていく必要があると感じた。

また、アメリカで見た地域の人々や団体の取り組みを参考に、日本でも地域社会の問題について、自分たちに何ができるかを考え、活動を行なっていきたい。

〔研修後の抱負〕

今回の研修を通し、英語の学習にもっと力を入れていかなければならないと感じた。言いたいことや伝えたいこと、聞きたいことがうまく伝わらず、とてももどかしい思いをしたためだ。言葉がないと本当に伝えたいことは伝えることができない。実用的な英語を学び、これからに活かしていきたい

（別記様式3-2）

学 生 海 外 研 修 報 告 書

鹿児島大学長　殿

研修参加者

所 属（学部（研究科）・学年）: 法文学部・3年

氏 名: 吉田　龍太朗

授業科目名	海外研修基礎コース　in　カリフォルニア
研修先（国・地域） 滞在地	米国・カリフォルニア
研修期間	平成29年2月19日　～ 平成29年3月5日

〔研修を通じて得た成果〕

このカリフォルニア研修で自分はLGBTについてのフィールドワークがとても印象に残りました。LGBT活動が盛んなサンフランシスコのカストロの町を調査し、この町の店で働いているビターさんという人にLGBTについてどう考えているかを聞きました。彼らはLGBTについては何も考えないと言う言葉がすごく印象深く、彼らは自分がレズだとかゲイだとかは考えずに、人間が好きであるということには変わりはないという考えを持っていました。自分はどこかで、レズやゲイの人は少し変わっている人だと思い込んでいましたが、実際は自分達とは何も変わらなく、好きになった人がたまたま、女性同士だったり男性同士だったりするだけなんだと、話を聞いて理解すすることができました。また、LGBTの人達は第二次世界対戦の時にナチスの人達に差別された話も聞いて、そのような時を経て、今のLGBTの人達がいるんだと実感することができました。今もLGBTの人達の差別がなくったというわけではありません。日本では、まだまだLGBTの活動は盛んではなく、レズやゲイの人達はオカマなどという言葉で揶揄されます。自分が今回お聞きしたLGBTについての話を聞いて、自分もまだまだLGBTについて以外のことでも偏見をしているんだと改めて感じることができました。今回の経験が自分のあらゆることの偏見について考える出発点であり、ここからLGBTだけではなく、様々の人間を差別している人達に、私達は何も変わらない同じ人間であり、人間は人間を愛する生き物であるんだと、これからの学生や大人の人達に教えていきたい。そして、何より今回学んだ事は、海外に行かないと分からないことであるということです。このような経験を積んでもらうためにも、これからの後輩の学生には、このような経験を話す事で興味をもってもらい、自分も海外経験を積みたいと思ってもらうことこそが一番大切なことであると思いました。そして多くの鹿児島大学の学生が自分の可能性を広げるために、海外経験をしてほしいと考えています。

〔研修後の抱負〕

今後の課題としては、鹿児島とセバストポールのコミュニティの継続だと考えています。今回このような研修を企画して下さったきっかけは、鹿児島大学のちささんという学生のおかげだとセバストポールの人達は話していました。彼女は、小さい頃に佐賀県の武雄市の姉妹都市としてセバストポールに訪れ、また来るねと約束し、本当に学生として、セバストポールで住む日系人について学びに来ました。そうした関係の継続は、これからの日本と海外の地域コミュニティ同士でとても大切な課題であると思いました。自分自身も、アメリカの地域社会と鹿児島をつなぐことに取り組みたいと考えます。